

第1章 令和元年度の研究について

研究テーマ

『 接続期の教育における学びを探る 』

～接続期プログラムの作成～

1. 昨年度までの研究について

本園では平成26年度より、幼児期の教育と小学校教育との連携・接続（以後、幼小連携・接続）に関する研究を重ねてきた。以下に内容を記す。

平成26年度 「幼児期の教育における学びを探る」

～石川県内の保幼小連携の実態と課題（アンケート調査の結果から）～

石川県内公立小学校102校の教職員、石川県内の幼稚園・認定こども園・保育所（園）256園の教職員のべ2386名へのアンケート調査を行い、石川県内の幼小連携の実態を明らかとし幼児期の学びを小学校生活につなげるための連携の在り方を考えることを試みた。

幼小の教職員共に「互いの教育について知りたい」「幼児期の体験が就学後の学習や生活に役立つ」と思っており、「幼小連携の取り組みに興味をもち取り組みが必要だ」と思っているが、「年長児を迎える会」「就学前の情報交換会」の他の取り組みは十分に行われていないこと等が明らかとなった。本園が取り組むべき課題は「互いの教育を知る機会の充実」「幼保における接続期の教育の見直し」「接続期のカリキュラムの編成」であると考えに至った。

平成27年度 「幼児期の教育における学びを探る」

～生じた課題に対し、主体的・協同的に学ぶ姿

（アクティブ・ラーニングの視点から）～

初等教育から高等教育までにおいて一貫して求められている力として、また、幼児期の教育における学びを小学校以降の教育に携わる人に効果的に伝えていくための言わば「共通言語」として、アクティブ・ラーニングに着目し、幼児期のアクティブ・ラーニングの具体的姿と汎用的能力育成について明らかにしようとする取り組みを行った。また、その際の幼児の具体的な学びの特徴や実際に社会に求められる力との関係について考察することを試みた。

幼児は遊びや生活で生じた課題に対し他者とかかわりながら主体的・協同的に解決に向かうこと、幼児が主体的・協同的に課題とかかわる際、汎用的能力の育成がなされており幼児はアクティブ・ラーニングを行っていること、またその際の学びの特徴としては「感情体験」が多くなり、さらに社会に必要とされる力の育成につながっていることが明らかとなった。

平成 28 年度 「幼児期の教育における学びを深める」

～主体的・対話的で深い学びを促す環境の構成と教師の援助～

前年度に引き続き、幼児の「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」について研究を行い、特にアクティブ・ラーニングを促す環境の構成と教師の援助について明らかにした。

「主体的・対話的で深い学び」を促す環境の構成としては「心情を支える環境」「ひととかかわらざるを得ないもの・状況」「ひととかかわりやすいもの・場」「試行錯誤や工夫を促すもの・場」

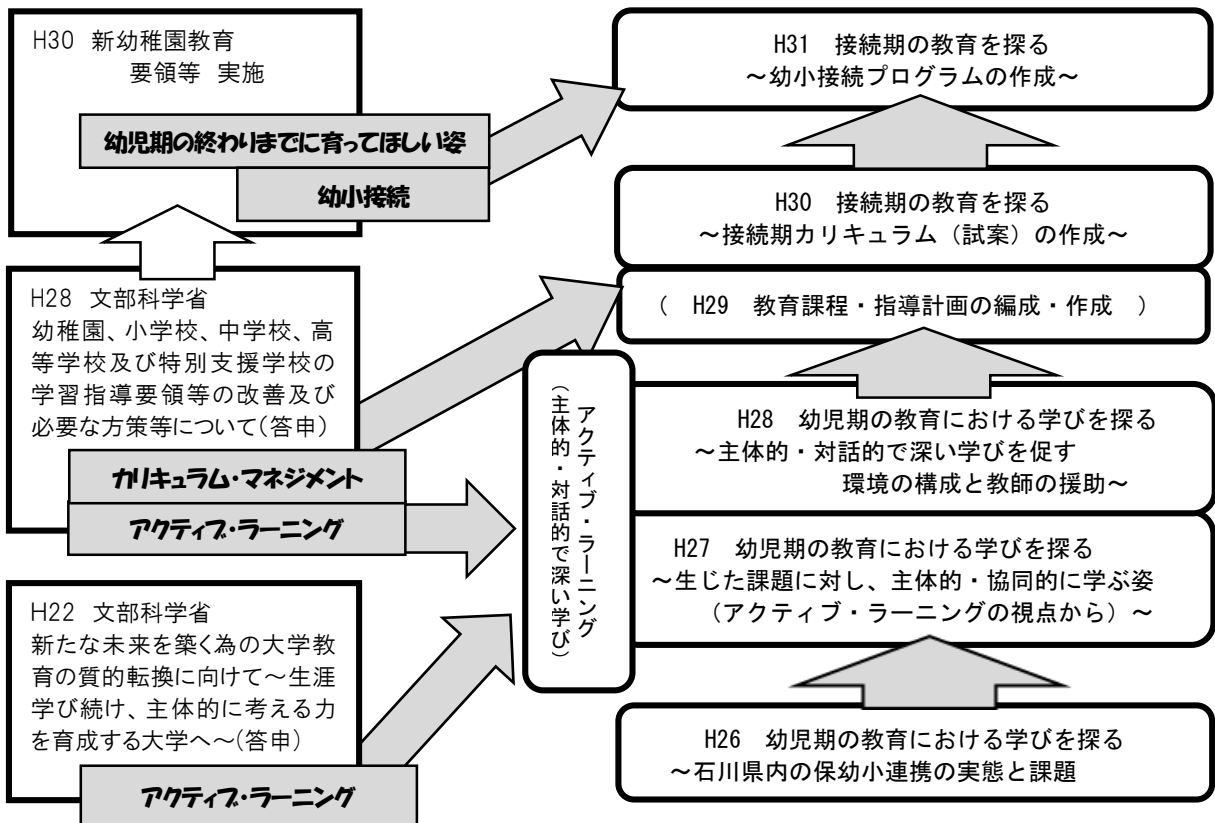
「イメージや目的の共有を促すもの・こと」「思考を促す情報」が有効であること、「主体的・対話的で深い学び」を促す教師の援助としては、「心情を支える」「周りをつなぐ」「見守る」「思考を促す」「協同を促す」援助が有効であることが分かった。

平成 29・30 年度 「接続期の教育における学びを深める」

～接続期カリキュラム（試案）の作成～

幼稚園教育要領の改訂を踏まえ、更にはこれまでの「主体的・対話的で深い学び」についての研究で得た知見を生かし、本園の教育課程の編成と指導計画の作成を行った。そして、それらの教育課程・指導計画とのつながりを持たせる形で、接続期カリキュラム（試案）を作成した。接続期カリキュラムは試案であり、小学校と連携して幼児・児童の実態に即したものとしていくことが課題となった。

《 平成26年度～令和元年度までの研究の流れ 》



2. 今年度の研究について

上記のように、本園ではこれまで幼小連携・接続について研究と実践を積み重ねてきた。今年度の研究はその幼小連携・接続に関する研究のまとめとして、接続期プログラムを作成し、幼小接続の推進を図っていきたいと考え取り組んだ。「接続期カリキュラム」の名称を「接続期プログラム」に変更した理由については後述する。

現幼稚園教育要領等・学習指導要領は幼児教育から高等学校教育まで育成を目指す資質・能力の三本の柱で貫かれており、学びの連続性を重視した構造となっている。幼児教育は「経験カリキュラム」であるのに対し、小学校教育は「教科カリキュラム」であるといったように、幼児教育と小学校教育では子供の生活や教育方法が異なっており、互いの教育内容や指導方法における違いや共通点について理解しなければ、学びの連続性を確保することは難しい。子供の発達を長期的な視点で捉え、互いの教育内容や指導方法の違いや共通点について理解を深める必要があり、その際に有効なのが、接続期のカリキュラムである。互いに接続について考え、接続期のカリキュラムによって幼児教育と小学校教育の教育課程をつなげるべく、本園では昨年度「接続期カリキュラム(試案)」を作成した。当然ではあるが、これは作成すること自体が目的ではなく、有効に用いることで幼児教育と小学校教育を円滑につなぐことが目的である。幼稚園と小学校を組織と組織としてつなげなければ学びの連続性を確保することはできない。どのように改善すれば、これを有効に用いることができるかを明らかにし、幼稚園と小学校を組織と組織としてつなげるべく、本研究に取り組むこととした。

3. 研究の目的

- ・接続期プログラムを作成する

4. 研究の方法

- (1) 本学附属小学校1年担任と接続期カリキュラム(試案)についての意見交換会を行う
- (2) 接続期カリキュラム(試案)の内容について、収集した事例等を元に再検討を行う

5. 研究の内容

(1) 接続期カリキュラム(試案)についての意見交換会

本園で作成した「接続期カリキュラム(試案)」(P〇〇参照)について、小学校1年担任教師3名と、幼稚園年長児担任2名で意見交換を行った。まず、本園で作成した接続期カリキュラム(試案)についての説明を行い、その後、この試案について広く話し合った。

「接続期カリキュラム(試案)」の説明として、幼児教育における教育課程・指導計画(方向目標・週数・育ちの総合的評価)と小学校教育における教育課程・指導計画(達成目標・時数・達成度の教科別評価)の違いを前提とし、教科ではなく、発達の連続性という観点から幼稚園と小学校をつなげたカリキュラムとしたことを伝えた。そして、「接続期カリキュラム

（試案）」の項目とその内容について説明した。その後の協議では、小学校教諭の率直な感想を聞くことができ、この試案の改善点についても考えることができた。協議の一部を抜粋して以下に記す。

（小学校教諭，以下小）

これを見なくても書いてあるようなことを、1学期にしてきたな、と思います。

（幼稚園教諭，以下幼）

先生方はここに書かれていることを行っているのだとは思いますが、そうではない先生もいらっしゃると思うので、可視化していくことが必要であると考えて作りました。

（小）7月のところに書いてあるのは、4月からも指導するけども、この時期に重点的にすると捉えれば良いのでしょうか。

（幼）その通りで、個人差もあるが大体この位のペースで進めていくことが良いのではないかと、と提案しています。

（小）私が初めて1年生を担当した時に参考にしたのは、昨年度の週案でした。

（小）週案や、時数が入っているものは使い勝手が良いですね。

（小）「カリキュラム」という言葉で書かれていると思うと、違和感があります。

（幼）「接続期カリキュラム」であり、幼稚園のものでも小学校のものでもない、双方を繋ぐ考え方を示したつもりです。小学校の先生が誤解しやすいのであれば、分かりやすい名前に変更した方が良くかなと思います。

（小）「接続期カリキュラム」がどのような性質のものか理解できました。スタートしていく時にそのような時間の使い方ができると良いと思うのですが、やらなければいけないことが多過ぎて...

（小）1学期末までにやらなければいけないことが減らないまま、接続期をゆっくりじっくりと、は難しいです。

（小）接続前期（年長児10月～3月）に書かれていることは、何となくは分かるのですが、具体的姿としてはちょっと想像できないな、と思います。

（小）「これができるようになりました」を明確に示してほしいです。実際の子供がスムーズに進学できるようにするのが接続期の目的で、カリキュラムをつくるのが接続ではないので。

この意見交換会で明らかとなった課題は多数あるが、本園がまず取り組む課題として、「接続期カリキュラム」という名称の変更と、接続前期の内容の具体的姿の例示を取り上げることにした。

（2）「接続期カリキュラム」を「接続期プログラム」へ変更

「接続期カリキュラム（試案）」の改善点として、小学校以降の教育におけるカリキュラムとは、所謂「教科カリキュラム」であり、それぞれの教科において、指導する内容、指導にかける

時数，評価規準について書かれている。それに対して，幼児教育におけるカリキュラムは「経験カリキュラム」であり，具体的な指導内容，指導にかかる時数等は書かれておらず，幼児の様子や，経験させたい内容等が書かれている。これらの違いから，「経験カリキュラム」の手法で作られたこの「接続期カリキュラム」を「カリキュラム」と名付けることが，小学校教員の誤解を生む可能性がある。さらに，交流活動の具体例等，今後の取り組みの資料を加え，カリキュラムだけではなく包括的な幼小接続のプログラムとしていくことを見据え，「接続期プログラム」という名称に変更することとした。

(3) 接続前期の内容の具体的姿の例示

「教科カリキュラム」を用いている小学校教諭にとっては，「経験カリキュラム」の手法で書かれたこのカリキュラムにおける，幼児や児童に経験してほしい内容について，具体的な姿を思い浮かべにくい，という点が課題として挙げられた。そこで，接続期プログラム（前期）の10月～1月，1月～修了までの期間における，項目「内容」（表1）の記述に該当する事例を収集し，補助資料とすることとした。

収集する事例は，5歳児の姿がより具体的にイメージできるよう遊びの場面と生活の場面について収集するだけでなく，園の特色についても伝わるよう，5歳児のみが行っている里山活動についての事例も収集した。事例については第2章に掲載する。

(表1) 接続期プログラム（前期）における項目「内容」

10月～	1月～修了式
・自分なりに見通しをもって生活する	・生活の流れがわかり，見通しをもって活動を進める
・友達と一緒に遊ぶ中で生じた課題を自分たちで解決しながら，繰り返し遊ぶ	・友達と一緒に遊んだり活動したりする中で生じた課題を自分たちで解決しながら生活しようとする
・きまりをつくったり変えたり，役割を考えたりしながら生活しようとする	・生活の中できまりを作ったり変えたりすること，役割を考えることで生活をより良くしようとする
・自分の考えを相手に分かるように伝えたり，友達の思いを受け入れたりする	・友達や教師の話をしっかり聞き，感じたことや考えたことを相手に分かるように話す
・学校全体での取り組みを通して，友達と楽しさを共有したり，達成感を得たりする	・自分たちの幼稚園生活を振り返り，できるようになったことに自信を持ち，何事にも意欲的に取り組む

(4) 接続期プログラムの見直し

接続期前期の具体的な事例を収集し、接続期プログラムと照らし合わせながら、事例の示す姿や内容がふさわしいものであるか協議していく中で、接続期プログラムの修正すべき箇所がいくつか見えてきたため、接続期プログラムの見直しを行った。

接続期前期に関しては、伝わりにくいと思われる内容について修正し、より具体的な記述を追加したりした。やはり園生活が想像できないまま読んでも伝わりづらいところがあるため、説明していく必要があるという意見が多く出た。接続期後期に関しては、具体的な修正よりも、「親しみをもつ」「受け入れる」等の言葉の捉え方について小学校教員との共通理解を図りたい等、小学校教員と協議を重ねていながら改善していきたいという結論に至った。

6. 研究の成果と今後の課題

本研究では、接続期カリキュラム（試案）について、小学校教員との話し合いを踏まえて見直し、接続前期の事例を補助資料として作成することができた。合わせて第2章に掲載する。

今後の課題としては、まずはこの接続期プログラムについて、実際の幼児・児童の姿を通しての改善を行っていく必要がある。接続期に互いの保育・授業を見合いながら、円滑な接続について共に考えていきたい。そして、接続期の1年生の事例収集、幼小交流活動等へ取り組みながら、それらの実践を接続期プログラムとしてまとめていくことで、さらなる充実を図りたいと考えている。